

キャサリン・マンスフィールドの「生」の見方

—「園遊会」と「蠅」を通して—

寺本明子*

(平成19年11月29日受付/平成20年1月18日受理)

要約: キャサリン・マンスフィールド (Katherine MANSFIELD 1888-1923) は、20世紀の短編小説の基礎を築いた作家である。彼女の作品にはドラマティックなロマンスも大事件も無く、有るのはありふれた日常生活と、そこに見られる登場人物達の繊細な感情である。喜びと哀しみ、憧れと幻滅、期待と落胆、好みと嫌悪、不安と安堵、情熱と諦めなど総ての感情が彼女の小説に織り込まれ、彼女は人間の性質だけでなく、日常生活に秘められた真実への深い洞察力をも発揮する。

若くしてマンスフィールドは小説家になる夢を抱き、その為には、何でも知ろうとする好奇心を持ち、幸せな女性の人生経験を積むことが大切だと考えた。しかし不幸なことに、その人生は向こう見ずな結婚、続いて流産、離婚、数々の病気へと進んでいった。一方で、愛する弟の死によって、彼女は20才で見捨てた祖国ニュージーランドについて書くことが使命だと気づいた。

軽率な生活のせいで患った病気に苦しみ、彼女自身の死を身近に感じることで、「生きる」ということについて書くきっかけとなった。「園遊会」(‘The Garden Party’)では、ローラが楽しい園遊会の正にその日に、貧しい荷馬車屋の死に出会い、死の荘厳さを知る。「蠅」(‘The Fly’)では、ボスが、インク瓶に落ちた蠅を助けるのだが、その蠅に数滴のインクを垂らして死なせてしまう。彼は蠅に、6年前に戦死した最愛の息子の姿をだぶらせる。このように「死」に関する話題を取り上げながら、彼女はまた、日常生活の中に「生」を発見し、その発見を感覚的に捉え、小説に描く。彼女にとって人生は、何か永遠なるものにつながる喜びの瞬間で成り立っているのだ。この論文では、上記の2つの作品を精読し、マンスフィールドの「生」に対する見方を研究する。

キーワード: 短編小説, ニュージーランド, 経験, 生, 示唆的結末

I. はじめに

34歳の若さで他界したキャサリン・マンスフィールド (Katherine MANSFIELD 1888-1923) は、短編小説の分野で大きな足跡を残した。彼女は長編小説を一編も残していない。それは、生涯に亘って彼女が様々な病苦に苛まれ、その為何度も転地し、落ち着いて執筆するゆとりが無かったことに因るのかも知れない。とは言え、短編小説は長編を短くしたものではなく、人生の一片の切り取り方が重要となる。現実の人生からほんの少し離れて見つめ、客観的にその一片を「切断し批評する丈の鋭利さ…或は愛撫し嘆賞する丈の共感する心」¹⁾、言葉を換えると、人生に対する冷静な detachment と限らない sympathy の二律背反の態度を兼ね備えて初めて書ける短編小説の形式が、マンスフィールドの感性に合っていたのだと言えるだろう。

彼女の作品には、ドラマティックなロマンスも大事件も無い。そこに見られるのは、作者自身が日常生活で観察した人達と彼等の感情の動きであり、周囲のどこにでも存在しそうな様々な人物の生きている姿である。作品に流れる時間は短く、ほんの数時間、或いは、一日、長くても数日

の出来事を彼女は丹念に描く。登場人物の数も少ない。「ジェイン・オースティン (Jane AUSTEN) が扱った田舎の村の数家族よりも更に限られている。彼女 (マンスフィールド) にとっては、自分の知っている一家族とその親戚数名だけで、普通の経験を表現するのに十分だったのである」とイアン・A・ゴードン (Ian A. GORDON) は語る²⁾。テーマも限られているにもかかわらず、切り取られた人生のひとコマひとコマに、彼女は人間の喜びと哀しみなど、人生を織り成す「明」と「暗」をさりげなく散りばめているのである。

マンスフィールドの総ての作品には、「日常の出来事を感受性と巧みな筆致で昇華する形で」³⁾彼女の経験が映し出されているとよく言われる。確かに、彼女ほど、浮き沈みの激しい波乱に満ちた「経験」をした人も珍しい。生来「書くこと」が好きで、家族に読み聞かせる為に書いていたオースティンと違って、マンスフィールドは作家になることを志した以上、その為にも様々な経験を積まなくては行けないと考えていたのだろう。この想いは、例えば「園遊会」(‘The Garden Party’) で、決して近寄ってはいけないと母親から止められていたにも関わらず、ローラ

* 東京農業大学応用生物科学部教養分野

(Laura) と兄のローリー (Laurie) が散歩の途中で、むかむかする不潔さに身震いするような貧民街を通ってみる場面に表われている。内的独白の「しかし、それでも人はどこへでも行かなくてはいけない。何でも見なくてはならない」は彼等のものであり、マンスフィールドのものであるだろう。

ニュージーランドの裕福な銀行家である父親と、繊細で感受性の強い母親と、姉2人、弟1人、祖母、独身の伯母達と暮らしていた彼女が、父親の方針で、1903年に姉2人と共にロンドンのクイーンズ・コレッジに留学したのが、彼女の「経験」の始まりである。ここで、ドイツ人のウォルター・リップマン (Walter RIPPmann) 教授の影響で、ウォルター・ペイター (Walter PATER), オスカー・ワイルド (Oscar WILDE), アーサー・シモンズ (Arthur SYMONS) などの英国の19世紀作家の文学に触れることになる。これが後に、作家として生きていく道を開き、彼女は、ワイルドの作品の登場人物さながらの波乱に満ちた生き方をするようになる。この留学は、上流家庭の子女のたしなみの一つとして行われ、3年後には父親の指示でニュージーランドへの帰国を余儀なくされるのだが、彼女は何としてもロンドンに戻ろうと考えていた。両親にとっては反抗的で手に余る子供だったらしく、2年後の1908年には、再びロンドンに戻るようになる。

彼女は、恋心を抱いていた古くからの知り合いであるガネット・トラウエル (Garnet TROWELL) の子を宿しながら、10歳年上の音楽家ジョージ・パウデン (George BOWDEN) と突然結婚し、しかもその翌日には夫のもとを去る。そして流産、また別の男性との恋愛と流産。こうした生活が原因となった淋病、肋膜炎や結核などの病気の数々が彼女の求める「経験」であったのだろうか。しかし、その後、「心の安定と愛情」と「作家としての仕事」を求めて、雑誌編集者ジョン・ミドルトン・マリ (John Middleton MURRY) と同棲生活を始め、6年後には、パウデンとの離婚の成立後、マリと正式に結婚した。二人は力を合わせて雑誌を出した一時期もあったが、やがて、病氣療養の為にロンドンを離れて様々な土地を転々とする妻マンスフィールドへの思い遣りよりも、ロンドンでの仕事を優先する夫に対して、彼女が不満をぶつけることも多くなっていった。

結局、彼女は結核を患い、転地療養や、評判が良い医者の治療に身をゆだねた挙句、最後には、夫マリの反対を押し切って、オカルト的な面も持つロシア人ジョージ・イワノヴィッチ・グルディエフ (George Ivanovich GURDJIEFF) の協会に入り、若くして亡くなってしまう。最後の数年間は、1828年創刊の由緒ある文芸誌『アシニアム』(The Athenaeum) の編集者・文芸評論家として名を馳せ、仕事を最優先して、病苦に苦しむ妻の所に会いに来ない夫マリに代わって、生涯の親友であったアイダ・ベーカー (Ida BAKER) に付き添われて、彼女はフランスやスイスで治療を受けながら、取り憑かれたかのように小説執筆に励んだ。彼女の後半生は病に苦しみ、死をいつも身近に感じる毎日であった為、「死」を題材にした作品が多いのだろう。最愛の孫の死を悲しみ、他人にはわかってもらえない孤独

を感じる「パーカーおぼさんの人生」(‘The Life of Ma Parker’) や、母を亡くした女の子が祖父母の家に行く「船旅」(‘The Voyage’), 突然間違っただけで葬列が自分の家に来てくる「家違い」(‘The Wrong House’), 死んだカナリアの思い出を語る「カナリア」(‘The Canary’) などがその例である。また、もう一つの「死」、最愛の弟チャミー・ビーチャム (Chummie BEAUCHAMP) の戦死も重要なテーマを生み出した。それは、祖国ニュージーランドを題材にした作品群につながってゆく。入隊する前の1915年に姉に会いに来たチャミーは、姉と2人で、尽きることなく故郷ウェリントンのお話をしていたと言われる。かつてニュージーランドを捨てた彼女は、今や弟の死に際して、自分の使命を見つけたのだ。

Now—now I want to write recollections of my own country. Yes, I want to write about my own country till I simply exhaust my store. Not only because it is ‘a sacred debt’ that I pay to my country because my brother and I were born there, but also because in my thoughts I range with him over all the remembered places. I am never far away from them. I long to renew them in writing⁴⁾.

一度は心の中で捨てたはずの故郷の景色が、小説の題材として甦る。exileとしてのマンスフィールドの性質は、その後、ジェイムズ・ジョイス (James JOYCE) やグレーム・グリーン (Graham GREENE) の中にも出現するものである。

「死」とは、老衰による自然死、病死、事故死、自殺、他殺その他のいずれであれ、理不尽なもの、しかも、それを避けられない人間にとって、最大の敵役である。その上、「死」は、一人一人で受け止めなくてはならない、誰にも訪れる宿命である。この論文では、とりわけ「死」を主題化した彼女の晩年の2つの作品、「園遊会」(‘The Garden Party’) (1921年10月) と「蠅」(‘The Fly’) (1922年2月) における「生」と「死」のあり方を比較・検証することにする。

II. 「園遊会」(‘The Garden Party’)

作品「園遊会」は、彼女の死の約15ヶ月前に著わされた、いわゆる「ニュージーランドもの」の一つである。それは、作者自身の家族を思わせるシェリダン家 (the Sheridans) の末娘ローラの成長物語である。マンスフィールドは、読者をいきなり物語の中に引き込む魅力的な書き出しをするが、この作品の始まりも、シンプルな言葉遣いで多くのことを語る。

And after all the weather was ideal. They could not have had a more perfect day for a garden-party if they had ordered it. (p. 245)

‘after all’の表現は、気持ちの高揚と、待ちに待った positive な期待感を感じさせるのだが、一方で、‘ideal’つまり「完全」という感覚も時と状況によって変わる可能性があることを示唆している。深く読めば、その後に続く ‘more perfect’ という比較級や、仮定を表わす if 節によって、‘ideal’の確信が減少し、‘troubled moments of

a particular life' につながる 'tension' を感じさせる⁵⁾。人間の不遜な心持ち、つまり、パーティーに似合ったその日の天気を注文できるかのような過剰な自信も含む第一パラグラフは、客観的な描写と見せかけて、この日誰よりも張り切っている主人公ローラの心象風景であることは明らかだ。この幸せに満ちた心は、「ミス・ブリル」('Miss Brill') や「幸福」('Bliss') の冒頭を思い起こさせ、その完璧な幸福感ゆえに、それを覆す何かが起こることを予感させるのに十分である。

シェリダン家の庭の描写には、一点の翳りもない。初夏が訪れた清々しい朝の明るい光が溢れる真っ青な空の下、総ての植物が生き生きとしている。庭一面の芝と花壇は輝き、バラは園遊会を盛り上げるのに最も相応しい花として、一晩の内に何百と咲き誇っている。重要なのは、この庭が natural でありながら同時に unnatural であるということである。庭師達が草を刈り、人間の手がそこここに加えられている⁶⁾。母親のシェリダン夫人から(表面的には)任されて、シェリダン家の娘達、とりわけ、主人公ローラは張り切って、パーティーの準備に取り掛かっている。そこへ、花屋から運び込まれる大量のカンナ・リリー(無垢や純粹を表わす)の花は、もう十分生命感に溢れた庭を更に飾るべくシェリダン夫人が事前に注文したものだった。総て余りにも準備が整い、作者の 'frighteningly alive' という表現に、読者はかえって微かに不安を覚える程である。作品の冒頭に仕込まれたその完璧なまでの明るさが極まる程、様々な伏線に導かれながら訪れる作品後半の暗さが際立つことになる。明るい光に映える色彩に溢れた穏やかな庭は、世の中の翳りを知らないローラに相応しいある種のエデンの園のようにも見える。しかしここで気をつけなくてはならないのは、この庭はローラを保護するだけでなく、母親が君臨し、その価値観の中にローラを押し留めようとする閉ざされた空間でもあるということだ⁷⁾。

ローラは生来、物事を 'arrange' することが好きであり、母や姉から 'artistic one' と称されている。しかも自分はそういうことは誰よりも上手にやれると思っている。ところが、パーティーの準備を始めた早々、庭の中でテントを張る位置について、ローラの指示は次々と職人達に反対され、彼女の提案や意見が聞き入れられないという事態に直面する。どうやら雲行きが怪しくなり、夏を迎える草花の象徴的な中心とも言うべき、つややかな葉と黄色い実の房をつけたカラカの木がテントで隠されるに至って、この園遊会に微かに翳りが差してくる。

シェリダン家の生命力を感じさせるのは、庭の植物だけではない。メニューの旗を立てたサンドイッチなど、正に「生きる」為に必要な食べ物が華やかに登場する。パーティーの最中にローラが生き生きと振舞う場が食べ物と結び付けられているのも象徴的である。

And Laura, glowing, answered softly, "Have you had tea? Won't you have an ice? The passion-fruit ices really are rather special." She ran to her father and begged him: "Daddy darling, can't the band have something to drink?" (p. 257)

この様な状況のもとで、園遊会の準備の最中、パーティーの楽しみであるシュークリームを運んで来た店員から、亡くなった荷馬車屋の話が聞かされるのは皮肉である。場違いな笑顔と共に締めくくられた姉嬢ジョーズ (Jose) の歌「この世は侘びし」のくもし出す違和感に似て、ここでは「死」も単なる噂話で、そうした話題を運んで来た店員は手柄顔、語り口も「面白半分」といった具合である。死者との階級の違いがあることに加え、あまりにも生命力に満ち溢れた世界では、「死」など恐れるに足らないのだ。シェリダン夫人は、そのことで急遽、園遊会中止を求めるローラをからかい、面白がってさえいるようだ。そして更に悪いことに、その話題は何も無かったかのように無視され、忘れられ、予定通り園遊会が催されることになる。そしてローラも、お客達の世話に走り回り、集まった人々を楽しませ、自分も楽しみを満喫する。圧倒的な力で明るさが暗さをねじ伏せている。

生命に溢れた一日が、午後遅くなり、やがて夕闇へと変わる予感、植物の命に再び託して、'And the perfect afternoon slowly ripened, slowly faded, slowly its petals closed.' (p. 257) となる。MAGALANER は 'nature and natural development, a developing and growing into maturity, and, inevitably too, a withering and dying'⁸⁾ を意味する上で、園遊会の庭が生から死に至る人生を象徴していると語るが、このシェリダン夫人の庭は「生」に満ちて、一点の曇りも無い虚構の世界であり、この比喩は、あくまでも庭の外でのローラの今後の経験を示唆するものと位置づけるべきであろう。

その日のお客達を見送った後、家族でお茶を飲んでいると、父親のシェリダン氏が、亡くなった荷馬車屋の話題を持ち出す。別な世界、殊に目障りとも言える階級の違う貧しい者達など、シェリダン夫人にとっては、全く関係ないものであったが、外の世界や考え方を知っているシェリダン氏にとっては違う。マンスフィールドは地の文に登場人物の心情を託すのが得意であるが、ここで 'Really, it was very tactless of father...' (p. 258) という心の中の声は、気まずい沈黙の中にあるシェリダン夫人のものというよりも、'father' という語から考えて、ローラの臨場感溢れるさり気ない独白と考えられるであろう。それは、自然に主人公の意識の流れに感情移入している作者の声でもある。その数行前で、ローラが園遊会をやめたいと言ったことについて母親が話す時に、ローラの様子は、「そのことからかわれたくなかった」というものであった。前出の父への反応や、おかしい提案をしてしまったという後悔は、母や姉達に寄り添い始めているローラの気持ちを表わしている。そして、母親の思いつきにより、パーティーの残り物を詰めたバスケットをローラが亡くなった荷馬車屋の家へ運んで行くことになる。

普段は近寄ってはいけないと言っていたにも関わらず、母親がローラを貧しい人々の所に行かせたのには様々な理由が絡んでいる。夫が出した話題に対して何らかの反応を見せる必要があったとも言えるし、園遊会を中止しようと言ったローラに対して、自分達の階級の者として相応しい

「心遣い」⁹⁾ (noblesse oblige : 高い身分に伴う義務) の規範を示そうとしたからでもあったろう。シェリダン夫人としては、相手のことを思うのではなく、自分の負担にならない程度で何かしてやれば十分なのである。その証拠に彼女は、貧しい人々はパーティーの残り物をありがたく思うに違いないと信じているし、持たせようと思った花束がローラの洋服を汚しそうだとジョーズに指摘されると、あっさり計画を変更してしまう。

ローラはバスケットを手にし、明るい世界に留まる家族から離れて、園遊会とは正反対の暗い世界（坂を下った下層階級の住む社会）へと進んでいく。「風は無く、暖かく、空には雲一つ無かった。初夏に時々そうであるように、明るい金色の霞が空にかかっているだけだった」という朝の様子から、「大きな犬が影の様に走り過ぎた。道はぼんやり白く光り、下の方の窪地に小さな家が影の様に固まっていた。今日の午後のはじめは、とても静まり返っている様に思われた」という変わり様である。

興味深いのは、シェリダン家と貧民街が同じ要素から成るということだ。例えば、両者は共に庭を持つ。前者が花で溢れ、後者がキャベツの株、病気の鶏とトマトの空き缶しか無いとしても、である。そして、煙の描写も、‘the great silvery plumes that uncurled’ と ‘[I]ittle rags and shred of smoke’ (p. 254) と対照的であるが、共に暮らした証である煙を出すことに違いは無い。また、園遊会の華やかな賑わいとは正反対であるが、亡くなった荷馬車屋の家にも人々が集まっている。シェリダン夫人は、子供達や甲問客の為にパーティーの残り物を届け、未亡人を自分の様な「食事を振舞う女主人」になぞらえている¹⁰⁾。マンスフィールドは、シェリダン家と貧民街の違いを強調すると共に、同じ「人の営みが行われる場」としての共通点をも確かに描き出していると言えるだろう。

ローラは、自分の華やかな帽子や衣装を場違いに感じながら、逃げ出したい気持ちを抱えて、亡くなった男性の家に着く。到着すると、人垣がさっと二つに分かれてローラに道が開かれ、あたかも皆が彼女の到着を待っていたかの様であった。しかし、人々の反応は、紛れもなくローラが抱く印象であり、彼女がそれに抗うこともできず、どんどん闇に引き込まれていく心情が表わされている。彼女は、バスケットだけを置いてすぐに帰りたいのだが、みすばらしい台所へ通され、更に寝室で死者と対面することになる。朝の開け放たれた家や広々とした戸外と対照的に、どんどん狭い所に入り込んでしまうのだ。そして、ローラは初めて「死」と対峙する。

There lay a young man, fast asleep—sleeping so soundly, so deeply, that he was far, far away from them [his sister-in-law and Laura] both. Oh, so remote, so peaceful. He was dreaming. Never wake him up again.... He was wonderful, beautiful. While they [people at the party] were laughing and while the band was playing, this marvel had come to the lane. Happy... happy.... All is well, said that sleeping face. This is just as it should be. I am

content. (p. 261)

「死」は、母や姉達のように無視すべきものでも、シュークリームを持ってきた店員のように面白がって噂するものでもなく、誰もが一度は受け入れねばならない厳粛なものである。ローラは当初、それは醜いもの、いわんや下層階級の人の死は、決して目にしてはいけぬ荒くれた醜悪さそのものと考えていたが、彼女が見たものは、一生懸命働いた後、健やかな眠りで一日を終えようとしている様な満ち足りた人物の顔だった—「絵のような顔ですよ…お嬢さん。」実際、そこで彼女が目にしたのは、「穏やかな (peaceful)」「美しい (beautiful)」もの、そして「驚嘆すべきもの (marvel)」だった。その穏やかさと美しさが、生を全うしたことによる大きな満足から来ていることに気づいた時、ローラには大きな発見と驚きがあった。

このような彼女の経験には、「帽子」の存在も関わる。帽子は頭を覆って守るだけでなく、隠す働きも持つ。つまり、帽子を被ることによって、ありのままの真実の姿が隠されることになる。人は誰も、自分を守る為の（言葉を換えると、自らの階層や職業を表わす）鎧をつけたがるのだが、それが帽子ということもある。ローラの父と兄が仕事に出掛ける前にブラシをかけている帽子、姉メグ (Meg) の緑色のターバン、職人達の麦わら帽、路地裏に住む男のツイードの帽子など様々である。ところが、ローラが被る帽子は、それらの人々の帽子とは違う別な意味を帯びる。それは、ローラの場合には、彼女がそれを被るのが受け身であるということだ。それはローラ自らが選び取った姿ではなく、総てを思いのままに整えようとする母親からの働きかけの結果であったのだ。母から「戴冠式」の様に与えられた帽子は、その日の園遊会を取り仕切るのを母親から依頼されたとの意味を持ち、‘the Sheridan heritage of snobbery, restricted social views, narrowness of vision’の象徴¹¹⁾である。このエピソードから、ローラが、まだ自分の力で人生を歩き出していないことが読み取れる。彼女は、園遊会の中止を提案した時も、母に素敵な帽子を被せられて、そのことをすっかり忘れてしまった。パーティーの残り物をバスケットに詰めて喪中の家に行くことに疑問を感じたにも関わらず、「朝はあんなに同情的だったのに、おかしいわ」と母親が言い放つと、‘Oh, well!’ とバスケットを取りに走り出した。そうであってみれば、死んだ男の前で、「死」の厳かさに圧倒された時に出た言葉が ‘Forgive my hat.’ であったのは、彼女の心の成長を表わすことになるだろう。葬儀に相応しい黒という色でありながら、シェリダン家の華やかさを思わせるデ이지の飾りのついた帽子が象徴する虚構を、つまり、人の手の及ばない奇跡である荘厳な死の前に、身勝手にも死者を自分達の思い遣りの範疇に巻き込み糺そうとした行為を謝ったのであった¹²⁾。残り物を入れたバスケットや、華やかな洋服や、園遊会を行なったことなど、謝るべきことは様々ある中で、母親から与えられた帽子について言及したローラは、母親の考え方—つまり、自分達の価値観が通用する世界から外に出ない生き方—からの精神的自立、広い世界への飛躍を予感させることになる。彼女はエデンの園

ともいうべき庭から外に出て初めて、自らの‘innocence’の代わりに、社会に触れて‘knowledge’を手に入れることになる¹³⁾。帰路を辿るローラは道案内を必要とせず、家の外へ外へと一人で進んで行くのだ。そこにも彼女の成長が見て取れる。

明るく一日が暗いトンネルを通過して、再び輝きを取り戻す。しかし、その輝きは初めのものとは違って、闇を知った者にこそ一際明るく温かく感じられるものである。マンスフィールドは、手紙の中でこの作品に込めた想いを語っている。

And yes, that is what I tried to convey in *The Garden Party*. The diversity of life and how we try to fit in everything, Death included.... Laura says, "But all these things must not happen at once." And Life answers, "Why not? How are they divided from each other?" And they *do* all happen, it is inevitable. And it seems to me there is beauty in the inevitability¹⁴⁾.

ローラは、途中まで迎えに来た兄に会う。彼はローラの一番の理解者であり、ここでも彼女が言葉で伝えられないことをしっかり兄として受け止めて、彼女の想いを自分の胸に包み込む。

... "Isn't life," she stammered, "isn't life—" But what life was she couldn't explain. No matter. He quite understood.

"Isn't it, darling?" said Laurie. (p. 261)

この会話の後、この兄妹は、家族が待つ庭に戻るはずだ。そして、また日常の生活が始まるだろう¹⁵⁾。しかし、心の成長を遂げたローラの目には、庭が単に命に満ちた閉鎖的な空間ではなく、生も死も包み込む広い世界の一部と映ることだろう。それは、故郷ニュージーランドを飛び出し、数々の経験を経て、再び故郷に目を向けたマンスフィールドの姿と重なるものの様に思える。

主人公ローラは、たった一日で、幾つもの大きな経験をしながら成長する。暖かで雲一つ無い初夏の、風も無く晴れ渡った清々しい朝、無垢な彼女が、草花が咲き乱れる自宅の庭での野外パーティーを、母親の指図で、生まれて初めて切り盛りすることになり、やっとのことで無事その大役を終えると、今度は、その日事故で亡くなった近所の荷馬車屋へお悔やみに出かけ、亡くなった人の穏やかな死に顔を見届ける。言葉を換えると、初体験ばかりのパーティーを切り盛りした後、死者に出会うという朝から夕方までの時間的経験と、上流から坂道を下って下層社会に行くという空間的経験をそれぞれ経由する過程で、主人公は少女から大人への成長という精神的経験をjする。そして、この世に命あるものは総て、一生懸命、精を出した一日を終え、何の悔いもなく満ち足りた気持ちの中に眠るように、人は皆それぞれの生を全うし、安らかな気持ちを抱いて「死」を迎えるのだと思ひ知る。このような経過を踏まえる時にのみ、主人公の「幸せ…幸せ…総て良しと、この眠っている顔は語っていた。こうあるべきなのだ。満足しているよ。」「ただ、不思議だったの。お兄さん、人生って…人生っ

ていうのは…」という述懐を理解できるだろう。作品の最後は、イギリス人好みの幾分曖昧な雰囲気以て終わるが、作者マンスフィールドは、叡智を備えた女性作家にしばしば見られるように、人生について、あからさまに「ものごと」の判断を下そうとしていないということである。

III. 「蠅」(‘The Fly’)

小さくて取るに足らないように見える蠅を扱ったマンスフィールドの作品「蠅」は、「ここは実に気持ちがいい」と年老いたウッディフィールド氏(Mr. Woodifield)が、以前の上司であるボス(boss)を羨ましがる声で始まる。この老人は病気を以て早々と退職し、動きも弱々しい。火曜日以外は家にいる様に妻と娘達に決められ、彼女達の言いなりであることを、受動態の連続する文章‘On Tuesday he was dressed and brushed and allowed to cut back to the City for the day.’(p. 422)が物語る。その様な彼は、5つも年上だというのに未だ現役で、管理職をこなすボスとは対照的である。家に帰りたくなくて、それでいて、何を話そうとしていたかも忘れてしまう御隠居老人に、ボスはウイスキーを得意気に御馳走する。しかし、実はこのボスも、ある意味では老人と同じく「受動態」の人間なのだ。つまり、もう何週間も前にした部屋の模様替えを、絨毯、家具、電熱器と自慢して、人から「誉められる」ことが喜びであり、重要なのである。更に、彼の事業は、息子に「継がれる」ことで完結するはずであった。息子に継がせるといふ計画の喜びも、人から「誉められる」自慢の息子だから生まれたに違いない。自分の生き甲斐や主体的な目標ではなく、すべては「人からどう思われているか」にかかっている。

この話には、木のイメージが点在している。「木がその最後の葉にしがみつくように、我々は最後の楽しみにしがみつく」という作者の言葉がある。普通は、葉が木にしがみつくののだが、ここでは逆である。木は老人を表わしており、今や、最後の楽しみにしがみつ、ボスを訪ねて世話を掛けながらおしゃべりする存在を暗示するものとなっている。ウッディフィールド氏の形容は、old, frail, dim, feebly, faintly と弱々しさを表わすものばかりである。そして次に、ボスも‘It gave him a feeling of deep, solid satisfaction to be planted there in the midst of it in full view of that frail old figure in the muffler.’(p. 423)と木に譬えられているということは、前出の「葉にしがみつく木」と同じ運命を辿るかも知れないという予感につながるだろう。所詮老人とボスに大した違いは無いのだ。

ボスに振舞ってもらって、普段は止められていて滅多に口にできないウイスキーをゆっくり舌の上で賞味した老人が言った言葉は‘It's nutty!’であり、ここにも木のイメージが見られる。何を言うのか忘れてしまっていた彼は、お酒で力を得たのか、それを思い出した。それが、ボスの一番触れられたくない息子の死の話題だったことは皮肉である。それまで、相手を哀れんで優越感を楽しんでいたボスは、急に弱い立場になり、立場が逆転してしまう。打って変わって饒舌になった老人が、自分の戦死した息子

の墓参りに娘達が行った時、同じ墓地にボスの息子が埋葬されているのを見つけたと話し始める。老人は、きれいに整えられた墓地の様子から、娘達がホテルで高く売りつけられたジャムの話まで、得意になって話す。一足先に息子の死を受け入れることができるようになっていた父親は、最愛の息子の墓地と、俗世間のジャムの法外な値段の話題を同じ土俵に乗せてしまう。対照的に、自分の息子の死を受け入れられないボスの弱さが浮かび上がる。

ボスの息子は、周囲からの人望も厚く、父親の後継者として修行中であった。その口癖は、‘Simply splendid!’である。周囲の評価を常に自分の幸せの尺度にしている父親と違って、自分が素晴らしいと思えばそうなのだという、伸びやかな感性が息子には感じられる。ここで、作者は息子と父親を比べることによって、どこにでもいそうな父親の性格を浮き彫りにして見せているということである。次の父親の行為が、子への想いや気持ちに臨場感や抒情性を与え、読者により説得的なものとなる。

老人が帰ってしまうと、秘書に、30分間誰とも会わないと告げ、息子を失った哀しみに浸ろうと部屋に籠もったボスであったが、なぜか涙が出てこない。泣けないこというるたえ、「泣きたかった。泣くつもりだった。泣く準備は出来ていた」という状態である。以前なら、‘My son!’と言っただけで、涙が溢れたのに、何かがおかしかった。DALYは、彼の心情が‘the self-pity he has mistaken for grief’¹⁶⁾という自己中心的なものであると指摘している。写真屋のセットの中で固い表情をしている軍服姿の息子の写真を見ても、「好きな写真ではない。表情が不自然である。冷たい、いかめしい顔をしている」と分析するだけで、やはり涙は出てこない。これは、我が子の死を受け入れたくない気持ちの表われでもあろう。

その時、インク瓶の中に蠅が落ちた。「助けて!」とでも言わんばかりにもがいているが、逃げられない。それを見たボスは、ペンで蠅を助けて、吸い取り紙の上に置いた。

For a fraction of a second it lay still on the dark patch that oozed round it. Then the front legs waved, took hold, and, pulling its small, sodden body up, it began the immense task of cleaning the ink from its wings. Over and under, over and under, went a leg along a wing, as the stone goes over and under the scythe. Then there was a pause, while the fly, seeming to stand on the tips of its toes, tried to expand first one wing and then the other. It succeeded at last, and, sitting down, it began, like a minute cat, to clean its face.... The horrible danger was over; it had escaped; it was ready for life again. (p. 427)

蠅が命に固執する様の描写は、大変詳細で力強い。何としても生き抜こうとするこの蠅の姿がこの作品の圧巻であり、読者に最も力強く訴えかける。

ところが、読者もボスもこの蠅の姿に感動したところで、何としたことか、ボスは、その蠅の上にインクの雫を落とすのだ。蠅は今度はどうするのかと言えば、最初は恐

怖で動き出せなかったが、再び羽の掃除を始めた。ボスは、‘He’s a plucky little devil...’ (p. 427) と、その勇気を心から賞賛した。しかし、蠅がその骨の折れる仕事を成し遂げると、ボスはその上にまたインクの雫を落とす。‘[a] painful moment of suspense’ が過ぎると、また蠅がインクを体から落とそうとするのが見えた。‘...the boss felt a rush of relief. He leaned over the fly and said to it tenderly, “You artful little b...” (p. 427) ボスは、今回は息を吹きかけ、インクを取る手伝いまでしている。そして、これが最後と思いつつも一度落とすとしたインクの雫で、ついに蠅は死んでしまう。‘Come on’ や ‘Look sharp’ という言葉の中に、生き抜いて欲しいというボスの気持ちが表われているだろう。息子の死、或いは広く「死」を受け入れたくない、否定したい気持ち、命のはかなさに抗う心が、蠅の生命力に託されたのだが、結果は無残なものとなった。

批評の中には、このボスについて、‘The boss has treated his son as he treated the fly, alternately assisting and encouraging, then crushing.’ という意見¹⁷⁾や、死の詳細な描写の冷酷さはマンスフィールドが迫り来る死を受け入れようとする絶望感を表わすという解釈¹⁸⁾もあるが、私はそれらには賛成できない。私は、この蠅の姿に託したマンスフィールドの想いは、死を目前にしながらも諦めずに最善を尽くし、命を全うすることの大切さであると考えられる。

実際のところ、作者自身も、当時、不治の病とされた結核に冒され、自らの死期が遠くないことに気づいていたに違いない。この蠅の健気に生き長らえようとする懸命な生命への固執、そして、ついに力尽きてしまう様を目の当たりにし、極めて小さな命とは言え、彼女は限りない共感を抱いたに違いない。言葉を換えると、この作品では、人から毛嫌いされる小さな蠅とは言え、それなりに少しでも長く生きようとする生命力を作者は把握しようとした。ここでは、蠅という対象が放つ生命的雰囲気を受け止めて、それらを「ありのままに感受し、表現しようとする」印象主義的手法が用いられている。

ボスは、蠅を死なせるのが目的ではなく、何とか助けた気持ちで、「生」への期待を込めて試したのである。「物事にぶつかるにはこうでなくちゃならない。これこそ本当の勇気である」と思い巡らしながらも、インクの雫を一滴、更に一滴、又一滴と落として、蠅の生命力を試したのだ。一方では、蠅の生への執着を賞美しつつ、他方、生きようとする力が尽きてしまうと、「ボスは死骸をペーパーナイフに乗せて屑籠に投げ込んだ。」この行為は、アンビヴァレンスとも見えるが、一生懸命生き長らえようと努力した後は、その結果を受け入れなければならないということに目覚めたのだという意味においてのみ、蠅の死に際してボスが‘a grinding feeling of wretchedness’を感じ、‘positively frightened’ (p. 428) となる様を理解できる。言葉を換えると、それまで自分の息子の死を受け入れるのを拒み、いつまでも過去の思い出に浸り、執着し、しがみついていたが、この時初めて、我に返るということだ。「今

まで考えていたことは一体何だったんだろう。何だったんだろう」と思いながら、ボスは今やっと息子の死をそのままの形で受け入れる。そして、現実の人生には容易に言い尽くせないものがあるという考えにつながる、些か暗示的な雰囲気でのこの作品も終わっている。

繰り返されるインクの雫は、繰り返しマンズフィールドを苦しめた病苦とも重ねられるだろう。実際のところ、彼女は夫マリへの手紙の中で、自分自身を蠅に例えている。

I feel like a fly who has been dropped into the milk jug & fished out again but is still too milky & drowned to start cleaning up yet¹⁹⁾.

もし、蠅が体の汚れを落として飛んで行くという結末だったら、これ程までに読者の胸に蠅の必死な姿が印象に残らないであろう。命は限りあるもので、それでも精一杯生き抜くところにこそ感動はある。蠅は、誰かに誉めてもらおうとしているのではない。自分の為に自分の命を生きている。そこにマンズフィールドは自分の姿を重ね合わせたのであろう。短い人生ではあったが、一生懸命自ら信じ疑わなかった「幸福」を求めてきたではないか。この世に生まれ、生を全うするからには、人は皆遅かれ早かれ死を受け入れなければならない。死期を意識したマンズフィールド自身、それを自らも受け入れねばならないと思うと同時に、残された日々を精一杯生き抜く決意を新たにしたに違いない。

IV. 終わりに

マンズフィールドは、自分の死を強く意識しながら、「園遊会」と「蠅」を書いた。「園遊会」では、一人の少女がたった一日で人生を見てしまう様、「蠅」では、この世に生を享けた者はそれぞれの生を全うすると、最後には厳粛な死を受け入れることになるということを描き、彼女なりの感情を作品の中に昇華したものと思える。どちらの作品でも、そうした人生のひとコマを少し距離をおいて見つめている。そこから生まれる抒情性が、表現し難い情感となり、読者の心にしみじみと伝わる。彼女の独創性は、「園遊会」のローラに見るような少女の心の波を、周囲の些細な日常的風物や人物や出来事に投影させたり、また、「蠅」のボスのように、傷つき易い人物の情緒の流れと周囲の出来事の流れとを見事に相関させたりしているところにある。

彼女の作品は概ね自らの経験に基づいた事実が主になり、それらの事実を積み重ね、事実に対する自分の感情を追いかけ、それを分析してゆくものとなる。彼女のどの作品においても、筋らしい筋は一つも無く、事実に対する一つの感情の流れから抒情性が生まれ、人生の持つ真実に迫る。彼女は、感情や情緒が心に浮かんだ時、作品を書き始めたときとさえ言えるだろう。

彼女は、対象が放つ生命力を瞬間的に全面的に把握する感受性を備えている。それは、一木一草、些末なものさえ

もいとおしみ、慈しむことから生まれる精妙な感性、細かなことも鑑賞し把握する能力、直観的洞察力による素朴な知的好奇心や愛情の所産であると言えよう。

マンズフィールドは、現実の人間や世界をそのままの形で受け入れようとしている。従って、たとえ描かれる世界は小さくても、そこには大きな世界の持つあらゆる要素が含まれている。小さな現実の世界が描かれ、そこに人間性や神的なものも、善や悪も、永遠や瞬間も、時間や空間も、生や死も、総てのものが日常の形で含まれているのである。

テキスト

Katherine MANSFIELD, *Collected Stories of Katherine Mansfield* (1945; rpt. London: Constable & Co. Ltd., 1976).

ページ数のみ記されている引用はここからのものである。

注

- 1) 江藤 淳, 『文学論集』(東京: 河出書房新社, 1985), p. 10.
- 2) Ian. A. GORDON, *Katherine Mansfield* (London: Longmans, Green & Co. Ltd., 1954), p. 19.
- 3) GORDON, p. 19.
- 4) Katherine MANSFIELD, *Journal of Katherine Mansfield*, ed. by J. Middleton MURRY (1927; definitive edition. London: Constable & Co. Ltd., 1954), pp. 93-4. (Journal: January 22nd, 1916)
- 5) W.H. NEW, *Reading Mansfield and Metaphors of Form* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 1999), p. 75.
- 6) Marvin MAGALANER, *The Fiction of Katherine Mansfield* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1971), pp. 112-3.
- 7) 三神和子, 『楽園を求めて: キャサリン・マンズフィールドの研究』(東京: 高文堂出版社, 1989), p. 43.
- 8) MAGALANER, p. 112
- 9) Kate FULLBROOK, *Katherine Mansfield* (Sussex: The Harvester Press Limited, 1986), p. 122.
- 10) Diane E. MCGEE, *Writing the Meal: Dinner in the Fiction of Early Twentieth-Century Women Writers* (Toronto: University of Toronto Press Inc., 2001), p. 120.
- 11) MAGALANER, pp. 116-7.
- 12) 三神, p. 60.
- 13) MAGALANER, p. 117.
- 14) Katherine MANSFIELD, *The Letters of Katherine Mansfield*, Vol. II, ed. by J. Middleton MURRY (London: Constable & Co. Ltd., 1928), p. 196. (Letter to William GERHARDI: March 13th, 1922)
- 15) Angela SMITH, *Katherine Mansfield—A Literary Life* (Houndsmills: Palgrave, 2000), p. 124.
- 16) Saralyn R. DALY, *Katherine Mansfield* (New York: Twayne Publishers, Inc., 1965), p. 109.
- 17) DALY, p. 111
- 18) 笠間弘美, 『マンズフィールド入門』(金沢: 北國新聞社, 1995), p. 80.
- 19) Katherine MANSFIELD, *Katherine Mansfield's Letters to John Middleton Murry 1913-1922*, ed. by John Middleton MURRY (London: Constable & Co. Ltd., 1951), p. 116. (Letter to John Middleton MURRY: January 11th, 1918)

Katherine Mansfield's View of Life

—'The Garden Party' and 'The Fly'—

By

Akiko TERAMOTO*

(Received November 29, 2007/Accepted January 18, 2008)

Summary : Katherine MANSFIELD laid the foundations of the 20th century English short story. In her works we can find neither dramatic romance nor unexpected development, but common everyday life, responses and delicate feelings towards life. Joy and sorrow, yearning and disillusion, anticipation and disappointment, love and hatred, restlessness and relief, passion and resignation—all these are woven into her short stories, through which she shows her deep insight into human nature and the truth hidden in ordinary daily life.

In her youth MANSFIELD had a dream of becoming a novel writer and thought it essential to feel curiosity to anything and to have various experiences of life, which unfortunately led to reckless marriage followed by miscarriage, divorce and disease. Confronting her favorite brother's death, she realized her duty to write about New Zealand, her home country she abandoned at the age of twenty.

Suffering from disease, she felt her own death near at hand and wrote about 'life' in contrast with 'death'. In 'The Garden Party', Laura is faced with a carter's death on the very day of a pleasant garden party and recognizes the solemnity of death. In 'The Fly', the boss drops some ink on a fly, which happened to fall in an inkpot and was taken out by him. He superimposes the fly upon his dearest son, who died in the war six years ago. Through handling 'death' like this, MANSFIELD also discovers 'life' in the everyday world, and expresses it in her stories. For her, a life is made up of such moments of joy as may communicate with the eternal. In this paper I will elucidate MANSFIELD's view of life through a close reading of the two short stories.

Key words : short story, New Zealand, experience, life, suggestive ending

* Foreign language studies(English), Faculty of Applied Bio-Science, Tokyo University of Agriculture